Evidence Based Practice

第41回　CKD・腎移植に関する勉強会　後進育成

2019.5.18　　Shiho Kosaka
Tokyo medical and dental University

本日のMenu

- 腎臓病看護における各種資格
- 継続教育における成人教育(Andragogy)など
- 継続教育・キャリアアップ教育のストラテジー
- キャリアアップを目指す人のバリア
- CKD　total　Careを目指した学会の取り組み
- 本勉強会の今後の展開

腎臓病看護における各種資格

対象とする治療	名称	認定学会・協会
腎移植	レシピエント移植コーディネーター	移植学会
腎臓病全般	慢性腎臓病指導看護師	日本腎不全看護学会
	慢性腎臓病療養指導士	日本腎臓学会・日本腎不全看護学会、日本栄養士会、日本腎臓病薬物療法学会
	慢性疾患専門看護師	日本看護協会
	透析認定看護師	日本看護協会
透析	透析技術認定士	日本腎臓学会、日本泌尿器科学会、日本移植学会 日本人工臓器学会、日本透析医学会
	CAPD認定指導看護師	日本腹膜透析学会

後進育成/継続教育における成人教育

教育する立場が備えるべき認識

- 成人学習者は、自己決定が備わっている成人・成人学習者として捉え、自己決定性を尊重して育てる必要がある
- 未熟な人々として捉えないことが必要！
- 成人学習者には豊かな人生経験・社会経験・職業があるとし、これらの経験を尊重し、学習資源として活用することが必要
- 看護実践において豊かな「行為の中の省察」を行っている点を尊重し、省察をする機会を保証する
- 教育者は、成人学習者の改善点を指摘するよりも「物語」を「聴く」姿勢を持つことが求められる

成人教育の特徴

I.　成人は自分達が学ぶことについてその計画と評価に直接関わる必要がある
(自己管理・自己決定と学習への動機付け)
II. (失敗も含めた)経験が学習活動の基盤を提供してくれる
(経験に基づく豊かな資源)
III.成人は、自分達の立場や役割、暮らしに直接重要と思われるようなテーマについて学ぶことに最も興味を示す
(社会的役割の発達課題に向けられる学習へのレディネス)
IV.成人の学習は、学習内容中心型ではなく、問題中心型である
(学習への方向付け)

M.ノールズ .成人教育の現代的実践 2002

成人教育・継続教育のための理論

社会的アイデンティティ理論

社会的アイデンティティとは、自己が所属する社会集団ないし、社会的カテゴリーの成員性に基づいた自己概念で感情や評価を伴うもの
集団に所属し、集団の一員として認められないという同化欲求と、集団の他のメンバーとは異なる独自な存在でありたいとする差異化欲求が同時に満たされている状態で安定しようとする

Tajfel & Turner, Social identity theory,1979

同化欲求	差異化欲求
集団に所属し、包括されたいという欲求	人と異なる自分でありたいという欲求
過度に個人化された状況で活性化し、より包括的な集団に所属しようとする	人を個人としてよりも集団の一部として見なされる時に、区別され、制限された集団に所属しようとする

チーム学習

チーム学習は、組織が生き残り反映するためには集団的学習が不可欠であり、その学習も線形に発展していくわけではないため、集団内の関係や行動を検討し、問題の意味を深く探るためのプロセスを所有する
チーム医療・多職種連携の中で必要な要素

チーム学習の特徴

- 十分なコミュニケーション
- 相互援助・相互学習
- 共通の価値観
- 学習の機会の適切な割合
- 学習の必要性と到達可能性
- Off the trainingからの学習の転移
- 学習資源の整備、学修時間の確保

Johanthan B, Fam Pract 2004

協働論

集団で作業する場合、仕事を分割させて担当させる分業があるが、分業するルールだけではなく
場所/時間/人/プロセス/対象の５つの要素を基礎として相互依存的に作用し専門家が成り立つ
特に一緒に働く人の「人となり」をよく知って、人間関係としての「社会的結合の専門家」を構築する
「人となり」を含めた深い理解に基づいた特定の人間関係を構築することが重要である

CI.バーナード，経営者の役割 1968

タックマンモデル

グループの経時的な進展

- **形成期**
  集団が共に働き始めようと努力しているとき、多様性と混乱という特徴を持つ
- **混乱期**
  メンバーが自分の役割を選びはじめ、共に働くやり方を探し、メンバー間に摩擦が起こる
- **統一期**
  メンバーがチームの中の分業についての合意に取り組む時期
- **機能期**
  メンバーがお互いを理解し合い、十分に調整されたやり方で共に働くとき

バジルバーンステイン、教育の社会学理論 2011

継続教育・キャリアアップ教育のストラテジー

継続教育－教育方法－

On-the-Job training (OJT)
- 現場で業務を遂行する中で知識や技術を学び取り、上司や先輩からの助言を受けたりする学習
- 集合研修や施設外教育で学習したことの応用能力向上の為に行う

Off-the-Job-training (Off-JT)
- 現場を離れて行われる学習のことで集合研修等が含まれる
- 新しい技術の獲得や概念の整理などを目的に行われる

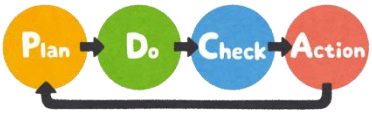
施設外教育
- 施設外で行われるあらゆる教育をさす
- 学会・研修会・講演会・勉強会など

施設外教育のメリット
- **職場を離れて学習に集中することが出来る**
- **自分の所属施設には無い新しい空気を吸うことが刺激となり、キャリアプランを発展させる動機づけとなる**
- **多施設の教育担当者との情報交換・ネットワーク形成の機会となる**
- **資格の取得や客観的評価が得られる**

継続教育－学習形態－

	概要	利点	欠点
講義	講師が少数から多数までの学習者に 知識・技術を伝達する	知識や技術を一度に多くの学習者に伝えることが出来るため、短時間で多数の学習者への教育が可能である。 また、教授者が必要な知識を精選し、まとめて伝えることが出来るため、学習者にとっては効率よく知識を得ることが可能	対象者が多数であると学習者が受け身と成、学習意欲が低下する場合がある
演習	模擬的な状況を設定し、学習者が実践的に経験する場を与える。 方法としてはロールプレイやシミュレーション、事例検討などがある	技術を学ぶ際に必要とされる学習などに適している	対象者が多数である場合は方法に工夫が必要
グループワーク	数人の学習者にグループを組ませ、ひとつの課題を与えて時間内に解決させる学習方法。 討論形式ではなく、実際の状況を想定した中で集団で作業を行う	グループで1つの課題を解決するため、協調性を向上させることが出来る 教授者からは、個々の学習者がグループの中でどのような立場になりやすいのかを把握することが出来る	参加に積極的な学習者と消極的な学習者にわかれる場合がある

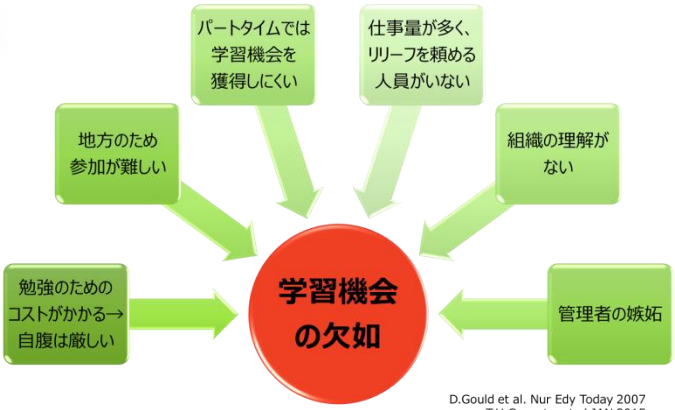
「継続教育の基準 ver.2」活用のためのガイド、日本看護協会 2013



継続教育－教育計画－

成人学習者の特徴を理解した上で教育計画を立案する
- 交替勤務であることを考え、同一内容の研修を曜日や時間を変えて複数回開催する
- 知識を実践に適用する力を育てるために、講義での知識学習だけで無く、事例検討やロールプレイなど**参加型学習の方法**などを活用する
- 各研修の学習目標に沿って、**個々が自分の学習目標を自分で設定**するよう方向付ける
- なぜその研修や知識が必要であるか、どのように実践に生きるのかなど、研修企画の背景や目的を丁寧に説明し、**研修参加への動機づけ**をはかる
- 個々の経験や実践での知識を尊重し，**他参加者と共有できる場**をつくる

継続教育・キャリアアップのバリアとは？



D.Gould et al. Nur Edy Today 2007
T.H.Coventry et al.JAN 2015

年代によって異なる学習目的

教育を受けたくなるきっかけ
・日々の仕事の中から学習機会の必要性の認識
・＋αのタスクや、新しい仕事による学習のきっかけ

若年Nurse
・学習はキャリアの構築
・経験の習得

中堅Nurse
・仕事と家庭のバランス
・仕事の興味と多様性の増幅

高齢Nurse
・仕事の整合性/調和/一貫制

I.A.Pool et al.Int J of Nur Study. 2015

腎不全看護学会の取り組み　現状と今後

名称	内容	時期
治療選択特別研修	腎代替療法治療選択の診療報酬が設置されたため、6講座の特別研修を開催中 例)事例研究、エンドオブライフケア、コーチングなど	年間6回程度 1講座2時間×3/day
DLN受験対策セミナー	DLN試験に向けた特別講義	9月　3日間
透析看護入門研修	透析看護の講義と実習	5月　2日間

CKDプロジェクト委員会
- **腎不全全期に関わるExpertを招集し、腎不全看護(保存期・移植・透析)と理論・事例をまとめたガイドを作成する**
- **2020年6月に保存期ガイドを出版予定、2021年以降移植・透析も出版予定**
- **腎不全看護初学者から、ベテランまでをカバーできる内容にし、腎不全看護でのEBPが実践できるようにシステマティックレビューをもとにガイドを作成**

CKD・腎移植に関する勉強会　今後の展開

- **地方委員との連携強化**
- **勉強会の全国展開→情報過疎・仲間作り**
  過疎な場所での勉強会開催
- **各種学会とのコラボレーション**
- **多職種との連携強化**
- **事例検討などのアクティビティ**
- **後進育成**